

淚香全集

29

宝出版株式会社

昭和五十四年七月三十日 発行

定価三八〇〇円

著 者 黒 岩 涙 香

発行者 久 保 欽 哉

〒187 東京都小平市小川西町三三
発行所 宝出版株式会社

電話 〇四三 四二七三
印刷製本・参陽社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

捨

小

舟

(上編)

目次

捨小舟	三
序	五
捨小舟（上編）	九

捨小舟序

近時作小說者不啻千百也其所刊行
者多虛構而人却渴說之少者何哉
蓋由小說利行蓋多而生可讀者少也
誠算近時小說家稍有手腕者饒得
二三元此人必勞力於字句推敲之閒又
拘泥理想觀察之識論一回一章之文
動輒要一二日如難復餘力及其他若
此等偶雖有世文字金玉之生規矩小

實御色淺尚未足醫讀者渴也
淚香君初多以所謂揉作小說出也
以是世以天別為一家能去其害而若
稀矣至此時天出白契現人之運出及
此去其影君手統漸去君所長非相揉
依小說也蓋天於小說其餘技也不自以
說家為依故其小說一棄所成不必事
技敵敵倫其作一回一章每只用一二
時間而已其理其觀察自謂多妙

此亦以筆湧出若夫玉樹花折包如
書既所書矣是皆筆鋒之自然才華
之餘裕而已若試使天一為小說家評之
人其一氣呵成者更莫能敵其一二時
間尖更用一二日乃成之所至者殆不可
知也而君不為之者以之為餘技也頃者
撰小弁刻年重刊一百五十有餘卷有
於數之長篇大作也此書一出庶幾
初學讀者之久渴矣

乙未之夏

紅夢樓愛花序

第一回

今より卅余年前、クリフと称する英国の一港場に、水夫俱樂部と綽名せらるゝ酒
 店あり、出る船入る船の船長水夫が強き酒に腸を洗ひ手柄話しに海上の勞を忘るゝ
 場所なれば、店の内は唯だ酒の臭ひ、莫の煙り、硝燈の油煙に咽返る程なれど、生
 涯汐風に揉るる身は左までも思はぬにや、宵の程より引も切らぬ程の繁昌なり、
 夜の將に九時とも覺しき頃、茲に入來る一人は親船の船長と覺しく背高くして筋骨
 逞しく、顔は殆ど銅の色を為し、年も四十近くに見ゆれど、若し日に焦げたる其色
 を洗ひ落さば猶ほ三十を多くは越えぬならん、歩み入りて最も手近かなる腰掛に、
 最と大優に腰を卸し、誰か知りたる人もやと思ふ如く静に四辺を見廻す様、人に使
 はるゝ人には有らで確に人を使ふ人なり、酒汲場より此様を見る店の主人は一目に

て金目の客と踏みたる如く、早く給仕に御用を聞けと命ぜん為にや急しく店方に眼を配れど、生憎孰れの給仕も外の客に急しき折柄にて手の隙きたる者見えざれば、主人自ら出来りて、斯る店には不似合なほど丁寧に頭を下げ「今度の航海は毎もより余ほど長くお掛りでした、定めし沢山の儲がお有成つた事でせう」と云ひ黒き顔に猶更ら目立つほど白き齒を露出して笑ふ様子は、久しく此客を知れるに似たれど、実は知れるに非ず若しや幾度か此店へ来りし人なるやも知れねば粗忽をせぬ為め用心しつ斯る挨拶を吐く者ならん、客は騒がず猶ほ四辺を見廻しつゝ「オ、久しく海に居た為に、確とは月日も覚えぬが今日は何でも三月の——」と言掛る後を取り主「ハイ三月の五日です客」では今日だ、今日が約束の日だ、誰か己を尋ねて来た者は無かつたかな」主人は礎と困り「エ、貴方様、左様ですネ、色々の方を尋ねて来る人は毎日幾人も有りますが、エ、貴方様のお名前はツイ失念致しまして、口先に転々して居るけれど出て来ません」客は最と笑しげに「亭主仲々世辞が好いなア、失念

したのでは無い己の名を知らぬのだ、己は此店へ来るのは初めてだよ、自分の名を云はずに尋ねたのは己の抜きだつた、己の名は立田と云ふのだ、誰か第二立田号の船長立田と云て己を尋ねて来た者は無つたか」亭主は極り悪げにもせず「ア、立田様、成る程此店へ初めて、道理でお見外れ申て居ました」と辻褄合ぬ返事を為し更に「イヤ未だ尋ねては見えません様に思ひますが、其の方は何の様なお方ですか」客は合点の行かぬ如く「イヤ其者は第一立田号の船長心得で横山と云ふ者だ、己が米国の方へ航海して居るうち横山は東洋へ航海し久し振で英国へ帰るから三月五日にクリフの水夫倶楽部で逢うと、先々月己の船へ手紙を寄越した、約束など違へる男では無いが、ハテナ、背が低くて此上無い正直者で主「では多分、今にお見えに成ませう、夫まで何か一口召上つてお待ちされば客「爾だ何か強い酒を持て来い」と命じ第二立田号の船長立田は頑丈なる時計を出して時間を眺め「早や九時過だ、何でも二月の末に此港へ着くと云ふ約束だから最う充分来て居る筈なのに」と呟きし

が、其うちに主人は瓶の口を抜きて持来り、之を立田の前に置き、何でも第二立田丸の船長立田と云へば第一立田丸と云ふも此人の所有なる可く、既に第一立田丸にて充分に金を儲け、更に第二の船を作り、自ら其の新しきに乗り、古き第一は雇人に任せある者ならん、米国の航海より帰りしと云へば定めし懷中も豊なる可しなど、夫とは無く直踏する様子なりしが忽ち何事か思ひ出せしと見え「イヤ少しお待ち下さい」と云ひ急ぎて勘定場へ立去りしが、頓で莞爾と笑乍ら一通の手紙を持て来り「イヤ一昨日此様な手紙が届いて居ます、表に留置と書て有ますから、多分受取る方が其中に見えらうと帳場へ預つて置ましたのをツイ忘れて居ました」と差出せり、立田は受取りて之を見るに成る程「水夫俱樂部留置立田様」と宛て有り、確かに待受る第一立田の船長心得横山と云ふ者の筆蹟なれば、封押開きて一息に読終り「アア途中で降す荷物が出来、夫が為め手間取るから十日で無ければ茲へ着かぬと書て有る、久し振に彼れの正直な顔を見て、手を握つて一杯吞うと思つて来たら、十日

で無ければ、エ、此様な残念な事は無い」と痛く失望する有様は思ふ事を胸に包ま
 ぬ斯る人の常とは云へ、其の横山と云へる者を無二の友として慕ひ居る事も知らる、
 亭主は得たりと喜ぶ如く「イヤ十日と云ても最う直です、二階に空た室が有ますか
 ら夫まで茲で御逗留成されば立「仕方が無い、爾う頼まう」と云ひ全く分別を定め
 し如く硝盃を取りて一息に呑乾せしが、此時隣りの二間より嚙喰として洩来る胡弓
 の音と共に最と優かなる音調にて謡ひ出る弱き女の声聞ゆ、浪の音風の声には少し
 も感ぜぬ船長なれど此の優かなる謡の声は殆ど魂の底までも響く如く思はれて、其
 儘硝盃を下に置き、目を細くして聞惚れしが、頓て其謡の終ると共に我に復り「亭
 主、今の謡は誰が唱ふ亭「毎夜此店へ稼ぎに来る少女ですよ、次の間で一曲済みま
 したから今にも茲へも来るでせう」云ふ折しも最と老耆れし老音楽師の手を引きて
 次の間より徐々と出来る年十五六と思はるゝ一少女、客の注文を待つ如く闕の此方
 に立たるが、垢に染みたる衣服を纏ひ、殆ど見る影も無き迄に零落れたる姿なれど、

唯だ其容貌の可憐にして最美しきには天より降りし仙女かと思ふほどに、船長は怪みて茫然たるのみ

第二回

少女が姿の美しさに船長立田は暫し恍惚と見て有しが其うちに少女は老音楽師の胡弓に連れ再び歌ひ初たり、胡弓は老耆れし人の弾く事とて、其音も手と共に震ひ、聞くにも足らぬ程なれど唯だ少女の姿と少女の声は広き世界に又有んとも思はれず、多年世界を経廻りて多くの美人を目に留し船長なれど、只管らに感じ入り、其身も一曲所望せんと思ふ折しも、老音楽師は胡弓の手を停め少女に向ひて「オ、持病が起つて腰が痛む、今夜は是だけで帰らうよ」と云ふ、少女は之を扶け起し唯だ「ハイ」と答へしのみ直に老人の手を取りて殆ど抱上る如く痛みながら、其所を去り店の出口を指し出行くにぞ立田は猶も茫然と其の後姿を眺むるに、此時一方の腰掛よ